

展覧会紹介：没後 50 年記念 竹園自耕一蒔絵と図案一	2
展覧会紹介：国際漆展・石川 2017 輪島展.....	3
漆の小箱 21 《錦秋》に見る山崎覚太郎の動物表現について	4
ミュージアムショップからのお知らせ、当館友の会夏季研修旅行報告	5
INFORMATION.....	6



《花鳥文飾笥》輪島市指定文化財・1932年 第13回帝展特選 石川県輪島漆芸美術館蔵
《漆絵衝立》(部分)1940年 石川県立輪島高等学校蔵／《秋草模様漆黒手箱》図案(部分)1936年 石川県輪島漆芸美術館蔵

没後50年記念 竹園自耕たけそのじこう — 蒔絵と図案 —

会期 9月9日(土)～11月6日(月) *会期中無休

竹園自耕(1892・1967)は輪島で初めて帝展で入選を果たした漆芸家です。当地における漆芸の礎を築き、戦時中は漆の確保と技術の継承に尽力するなど、その功績は枚挙にいとまがありませんが、これまでその制作活動の全貌が明らかにされることはありませんでした。本展覧会では、精細巧緻と評された作品とともに意匠構成のプロセスを示す図案を展示し、竹園の歩みを振り返ります。

竹園自耕(本名耕太郎)は1892(明治25)年、輪島市河井町に生まれました。絵を描くことを好んだ竹園は、輪島男児尋常高等小学校の卒業を控えた1906(明治39)年、蒔絵の鈴木繁太郎に弟子入りしました。鈴木は尾張から輪島へ移り住み蒔絵の技術を伝えた飯田善七の高弟にあたります。4年の修業のうちに年季を明け、半年のお礼奉公を経て1910(明治43)年に独立。丁寧で遅れない仕事が業界でも認められていきました。

若き竹園の最大の功績は、帝展をはじめとする官展での活躍といえるでしょう。当時国内で最大の生産額を誇った輪島では、

人々の関心は必ずしも芸術的な一品制作に向けられていませんでした。ましてや彼らは一職人であり、作品制作のために仕事が遅れば大喝をくらいました。しかし、1929(昭和4)年、沈金の前大峰とともに帝展初入選を果たし、斬新な意匠の追求と高い技術を示した作品で世間の評価を勝ち取りました。

1932(昭和7)年、《花鳥文飾笥》(表紙)が念願の特選となります。本作品の文様に注目すると、四君子や鶴、帯状の連続文様までもが精密な凹凸によって表現されていることがわかります。漆で文様を描いたのちに金属粉等を用いて少しずつ肉上げを行ったもので、蒔絵師ならではの丹念な仕事を披露しています。一方で、慎重に調合された彩漆を巧みに配し、華やかさと品格を備えた漆芸の新しい魅力をも切り拓いています。

全国展での成功は、ひときわ目を引く意匠の研究なくしては得られなかったといえるでしょう。《漆器落葉文庫》のために制作された図案の数々からは、モチーフを個別に描き、重ねては離し、試行錯誤を行った

様子が分かります。

このほかに、輪島漆器軍刀外装会社の設立や、晩年にかけて展覧会活動から遠ざかり実用品製作に立ち戻っていった地元への献身を取上げ、人となりや技の魅力に存分に迫ります。日本を代表する漆器産地、輪島が生んだ希代の作家の世界を、どうぞ心ゆくまでお楽しみください。(寺尾藍子)



《漆器落葉文庫》図案 石川県輪島漆芸美術館蔵

国際漆展・石川2017 輪島展

会期 11月11日(土)～2018年1月14日(日)

*会期中の休館 12月29日～31日

本展は、漆芸の公募展として1989年(平成元)に始まり、今回は第11回目の開催となります。毎回、世界の十数力国から応募があり、漆芸の新しい広がりを考える国際的な展覧会として高い評価を得ています。本展の開催では、漆芸品を用いた現代的な生活スタイルや、新しい感性の提案などを広く国内外に求めることにより、漆器産業の活性化と漆芸を通じた国際交流の推進、さらには生活文化の向上が期待されています。

前回から、表現を主目的としたアート部門、計画的な生産や流通が可能な商品を提案するデザイン部門の2部門制になっており、大賞1点の他、アート部門、デザイン部門それぞれに金賞、銀賞、奨励賞が設定されています。また、審査員7名による審査員特別賞も設けられています。

今回の公募では、11の国と地域から176点の応募があり、一次審査(写真審査)を経て、7の国と地域から80点が入選しました(うち日本からは58点)。輪島展では76点を展示



【大賞】いのち
小 柳 真 弓

します。なお、輪島市在住の出品者は8名です。

大賞作品、千葉県在住の小柳真弓さんの「いのち」(アート部門)(写真上)は、蓋が乾漆、身が木彫の作品です。蓋の外側は黒漆の呂色仕上げ、内側は朱漆の塗り立てで、カッラを削った身には摺り漆が施されています。漆の美しさを、造形と塗りによって表現した点が高く評価されました。



【アート部門金賞】花を紡ぐ
黒木沙世

アート部門の金賞に選ばれた黒木沙世さん(石川県在住)の「花を紡ぐ」(写真下)は、錫粉を使った蒔絵の作品です。現代的な感性で、花が繊細かつ緻密に描かれています。この他にも、デザイン部門の作品や海外からの出品作など、多彩な力作が揃います。個性豊かな作品の数々をお楽しみいただければ幸いです。(河原法子)

ギャラリートーク

日時: 11月19日(日)

13時30分～14時30分

講師: 内野 薫氏(審査員)

*入館券が必要です。

漆の小箱 21

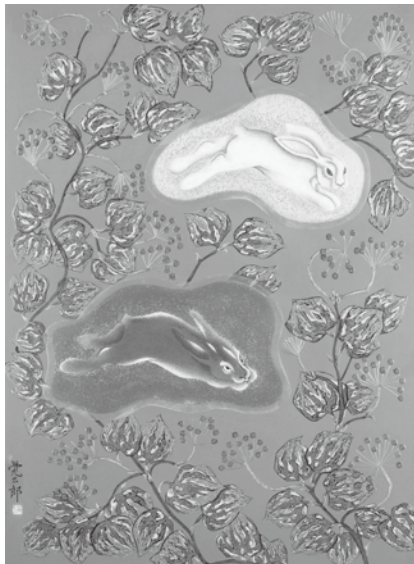
《錦秋》に見る山崎覚太郎
の動物表現について

皆さんは山崎覚太郎という漆芸家をご存知でしょうか。現代漆芸の先駆者と評される人物です。

山崎は1899（明治32）年に富山県東岩瀬町（現・富山市）で生まれました。小学校卒業後は富山県立工芸学校（現・富山県立高岡工芸高等学校）の漆工科で4年間髹漆を学びました。その後、東京美術学校（現・東京芸術大学美術学部）漆工科に進学し、六角紫水など当時の漆芸界を代表する巨匠に師事しました。大変優秀な学生で、在学中は特待生として授業料を免除されていました。東京美術学校卒業後は六角紫水から継承した彩漆を駆使して、現代的な意匠の作品を次々に発表していきます。

彼の作家人生の転機は1937（大正12）年に訪れます。文部省から工芸美術研究のためフランスに留学を命じられたのです。当国ではフランス屈指の漆芸家といわれる

ジャン・デュナンとアンドレ・マルガらと漆芸について対談・討論を行い、見聞を広めました。さらに欧米各国の工芸品を詳細に調査すると共に、同時代の工芸の傾向についても精通していました。当時欧米では生活の中に溶け込んだ装飾芸術が隆盛しており、彼に多大な影響を与えました。以前は主に硯箱や手筈などの立体物を制作していた山崎ですが、徐々に衝立や額など平面作品の制作も多くなりました。そしてこの頃から鮮やかな彩漆を用いた軽妙な作風を確立していきます。



当館所蔵の《錦秋》は1977（昭和52）年に制作された作品です。赤い実をつけたサンキライが兎を取り囲むように生き生きと描写されています。褐色と純白の二羽の

兎には周囲に金粉が蒔かれており、躍動感溢れる動きで表現されています。「錦秋」とは本来紅葉が錦のように美しくなる秋を指します。本作ではカエデやイチヨウなど代表的な秋の風物詩ではなく、彼自身が目にして美しいと感じた秋の情景を表しています。山崎は本作を制作した時点で78歳という高齢で作家としては円熟期でした。彼の制作意欲は老いても衰えを知らず、同年には本作のほかにも日展と現代工芸美術展に各1点ずつ作品を出品しました。

山崎の作品の大半が動物を主題としており、その作品からは動物たちへの慈愛に満ちた眼差しが感じられます。山崎は「私が動物を好んで主題に選ぶのも、虚飾のない、あるがままの生命の姿に、強く心を惹かれるが故に他ならないのである」と述べています。このことから山崎は動物たちから生命力の強さを感じ取り、自身の作品に反映させたのではないのでしょうか。

《錦秋》は9月4日まで展示室3で公開されています。山崎の描いたエネルギー溢れる動物達をどうぞご自身の目でご堪能ください。
（山内亜沙美）

▼ミュージアムショップからのお知らせ

・漆ブローチのガチャガチャ好評です！

今春から取り扱いを始めた漆ブローチのガチャガチャが大変好評をいただいております。初登場の「花と蝶」に続き、浮き輪や貝がらなどをモチーフとした「夏」シリーズが販売されました。ブローチは輪島の若手職人がデザインし、ひとつひとつ手作りしています。お求めやすくカラフルで、多くの方に漆の商品を親しんでいただきたいと期待を込めています。今後も新たなシリーズを企画中です。乞うご期待！



・展覧会関連商品制作中！

企画展「没後50年記念竹園自耕―蒔絵と図案―」の開催にあわせて、関連商品制作中です。展覧会開催とともに販売を開始いたします。

▼輪島漆芸美術館友の会「夏季研修旅行」

―歴史浪漫に思いを馳せる―

7月26日(水) 参加者27名

福井県方面

◇大本山永平寺

◇福井市立郷土歴史博物館

養浩館庭園

◇一乗谷朝倉氏遺跡資料館

復原町並み散策



会員を乗せたバスは定刻どおり6時30分に輪島漆芸美術館を出発。まず向かったのは「大本山永平寺」。そびえ立つ老杉の巨木に囲まれひっそりとたたずむ本堂。辺りには厳かな空気がただよっています。「七堂伽藍(しちどうがらん)」と呼ばれる山門・仏殿・僧堂・庫院・東司・浴室・法堂は日常の修行に欠かすことの出来ない重要な建物となっており、厳しい修行に励むひたむきな修行僧の様子を伺い知る事ができました。

その後「福井市立郷土歴史博物館(養浩館庭園)」、「一乗谷朝倉氏遺跡資料館(復原町並み)」を戦国の歴史と文化の息吹を感じながら見学。長い一日となりましたが、充実した時間を皆様が互いに共有されました。次回の旅行も期待に満ちたものになることを願っております。
(高森泰子)

▼追悼沈金の光彩魔術師・三谷吾一先生

―時代を画す沈金加飾法を拓く―

輪島市名誉市民・文化功労者の三谷吾一先生が去る7月12日にお亡くなりになりました。当館では、先生の逝去を悼み作品8点を9月4日(月)まで展示いたします。皆さまにご覧いただけましたら幸いです。

INFORMATION

セミナー

2017年度石川県輪島漆芸美術館文化講座 漆文化セミナー

第3回 「竹園自耕一蒔絵と図案一」

日 時 9月23日(土・祝) 13:30~

講 師 寺尾藍子(当館学芸員)

第4回 「輪島塗行商ものがたり」

日 時 10月29日(日) 13:30~

講 師 藤平朝雄氏(能登半島広域観光協会相談役)

TOPICS

▼ いしかわ文化の日 特別無料開放

期 日 10月15日(日)

▼ 輪島市民文化祭「あいの風」協賛 特別無料開放

期 間 11月3日(金・祝)~5日(日)

特別無料開放期間中は全館無料でご観覧いただけます。

▼ うるしの日 輪島塗で味わう「うるし茶」のおもてなし

日 時 11月12日(日)・13日(月) 9:00~16:00

会 場 エントランスホール *要入館券

▼ ふれて感じる漆芸技法アレコレ

日 時 11月12日(日) ①11:00~12:00 ②14:00~15:00

会 場 会議室 *要予約・無料

学芸員の解説とともに、実際の資料に触れながらさまざまな漆芸技法の知識を深めることができます。

▼ こどもワークショップ「マイストラップ」作り

会 期 11月19日(日) 9:00~16:00

参加費 100円

会 場 講義室 *予約不要

カラフルな金属粉で色付けしてストラップをつくりましょう。簡単に蒔絵師気分が味わえます!



*内容は予告なく変更することがあります。詳細はHPをご覧ください。

休館日

2017年9月5日(火)~8日(金)

2017年11月7日(火)~10日(金)



漆芸美術館だより 第81号

2017年8月14日

編集・発行 石川県輪島漆芸美術館
〒928-0063 石川県輪島市水守町四十苅 11 番地
TEL. 0768-22-9788 FAX. 0768-22-9789
<http://www.city.wajima.ishikawa.jp/art/>